

2025年度 シンポジウム 報告

外国人児童生徒等教育を担う教育者・支援者の育成 — 『多様性の包摂』の実現に向けて—

2026年1月31日(土)13:00-17:00
オンライン 参加者 253名 (お申込み 345名)

<主旨>

学校教育が多様性・包摂性の実現を目指す現在、外国人児童生徒等教育もまた、新たな局面を迎えようとしています。本ユニットは、「子どもたちの多様性が生きることばの教育」を目指し、開発・調査研究・研修事業を展開していますが、その一環として、シンポジウムを開催しています。昨年は「社会的包摂」の捉え直しをテーマに、マイノリティの子どもたちの教育について、現場の取り組みを例に検討しました。それを踏まえ、本年は外国人児童生徒等教育のフロントラインに立つ教育者・支援者に光を当て、多様性の包摂の実現に向けて期待される実践力や資質・能力、そしてその養成・育成について検討します。文部科学省の関連施策・今後の検討の方針についての講話と、多様な言語的文化的背景をもつ子どもたちの教育活動に長年携わってきた教育関係者、専門家によるパネルディスカッションで構成します。

また、これに先立ち、本シンポジウムの前半には、本ユニットの成果の一部として、2025年度に実施した研修・調査研究活動の報告を行います。

—プログラム—

13:00-14:00 本ユニットの2025年度事業成果報告

1 本ユニットの事業概要 齋藤ひろみ(東京学芸大学)

2 研修事業「多様性が生きることばの教育 2025」

1)オンライン研修 幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育

谷啓子・米本和弘(東京学芸大学)

多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり

小西円(東京学芸大学)・市瀬智紀(宮城教育大学)

2)実践交流会

河野俊之(横浜国立大学)・原瑞穂(東京学芸大学)

3 研究調査事業 外国人児童生徒等のウェルビーイングに向けた心身の健康課題とその教育・支援に関する調査研究 見世千賀子(東京学芸大学)

14:00-14:10 開会行事 ご挨拶 本学副学長 川手圭一

14:10-14:40 基調講話「外国人児童生徒等に対する教育の充実に向けて」

文部科学省 総合教育政策局 国際教育課課長 釜井宏行氏

14:40-16:50 パネルディスカッション

「外国人児童生徒等教育を担う教育者・支援者の育成—『多様性の包摂』の実現に向けて—」
趣旨説明 齋藤ひろみ(東京学芸大学)

発題1 「視線合わせから、意識合わせ、呼吸合わせへ—OECD Teaching Compass
で考える教育者コミュニティのこれから—」 東京学芸大学 教授 西村圭一氏

発題2 「学校教育現場で外国人児童生徒等の教育的包摂を実現する～大阪市における
多様な文化的背景をもつ子どもの教育から～」

大阪市教育委員会人権・国際理解教育グループ
プレクラスコーディネーター 山崎一人氏

発題3「外国人児童生徒等教育を「ライフコース」から考える 包摂は、その後の人生まで
届いているか」 群馬大学 教授 結城恵氏

発題4「多様性の包摂における教育者の役割— 外国人児童生徒等教育からの発信—」
国際交流基金日本語国際センター所長(東京学芸大学名誉教授) 佐藤郡衛氏

16:50-17:00 閉会

シンポジウムを振り返って

2025年度のシンポジウムからの私自身を含む参会者の皆さんの学びを、4名のパネリストの方のメッセージとして、表現すると、次のようになります。

「視座」(西村氏のご発題)を得て、現場の教育者の「エネルギー」を感じ(山崎氏のご発題)、「次の場」を展望し(結城氏が包摂の要点として示された)、「当たり前」からの解放(佐藤氏のご発題)への勇気が湧きあがりました。

その上で、子どもたちの教育・支援に当たる者が自身の「ライフコース」(結城氏)を、「レゴブロックモデル」(西村氏)を意識して描けるような「リスペクタント」(山崎氏)の組織開発を目指し、その実現のために「養成育成段階」「学校組織」「人的配置」(佐藤氏)に関してハード・ソフト両面から、現状を変えていくために、今後も、議論を重ねてまいりたいと思います。

参加者の皆さんのアンケート(113件)を拝見しますと、多様な立場で外国人児童生徒等教育に関わっていらっしゃる方が参加くださっています。また、その教育者の養成・育成というテーマでしたので、研修を企画・実施していらっしゃる方の参加も少なくありませんでした。そして、コメントには、文部科学省総合政策局国際教育課の釜井課長の関連施策に関する詳細な情報、OECDの教育者像や包摂概念からの新たな視座の提供と俯瞰的な分析・検討、そして、パネリストの皆さんのご経験をもとにした一人の教育者としての語りに、「示唆を得た、感銘を受けた、明日への可能性を感じた」といった感想が多数寄せられました。

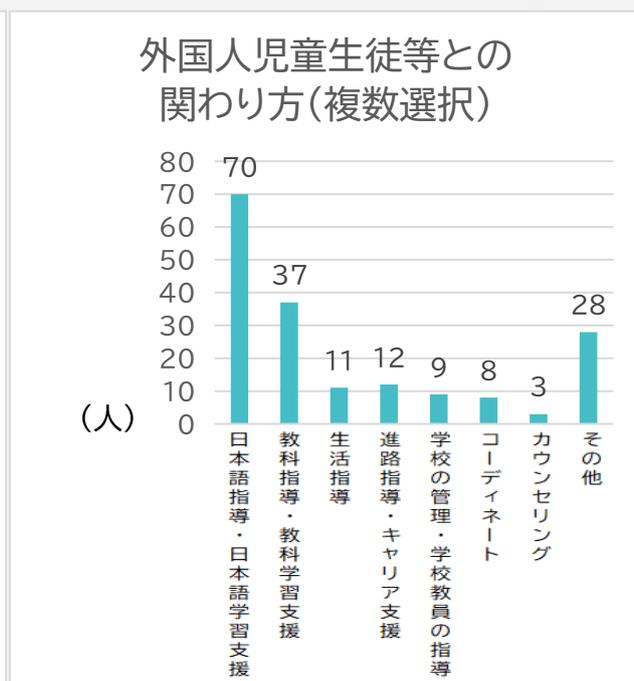
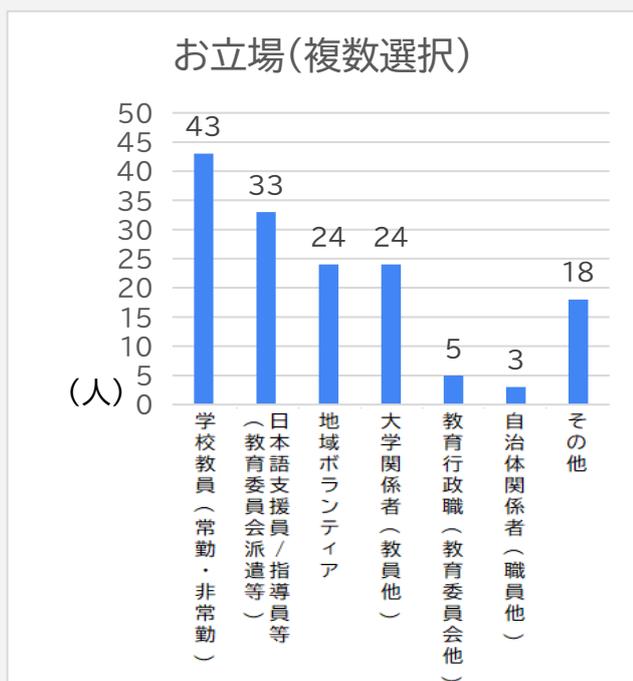
そして、私たちユニットのこの1年間の研修活動（オンライン研修2種類各3回、対面の実践交流会）と、心身の健康に関する調査研究の成果についても、その社会的意味に関するご意見をいただきました。研修の全体像を整理してご提示することや調査結果を公開することの必要性を改めて感じておりますし、大変うれしく思っております。

シンポジウムにて、外国人児童生徒教育の現在の課題と今後の展望について、理論的なフレームと現場の実際からの示唆を合わせて議論することができましたのも、この1年間、本ユニットの活動に積極的にご参加・ご意見くださった、参会者の皆さまのおかげです。ユニットのスタッフ一同、皆様の教育者としての使命と熱意に敬意を抱くとともに、一緒に議論できる幸せを感じております。改めて、御礼申し上げます。ありがとうございました。次年度も引き続きよろしくお願いたします。

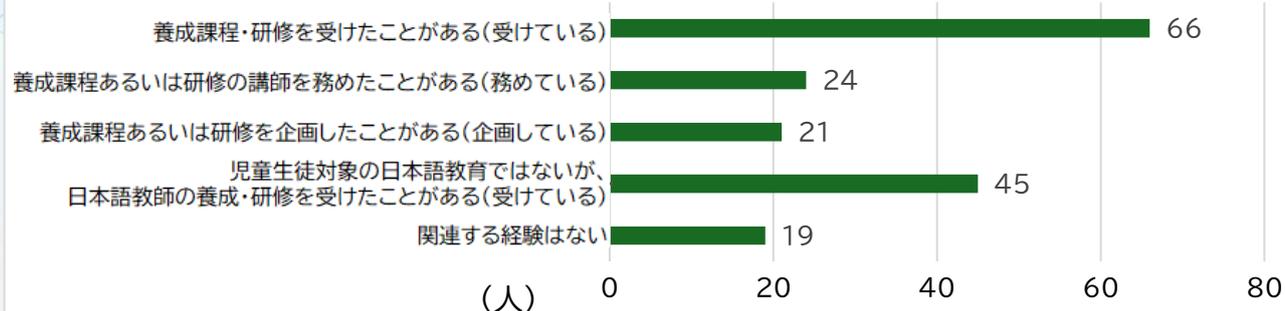
齋藤ひろみ（東京学芸大学・本ユニットユニット長）

……………<アンケートより>……………

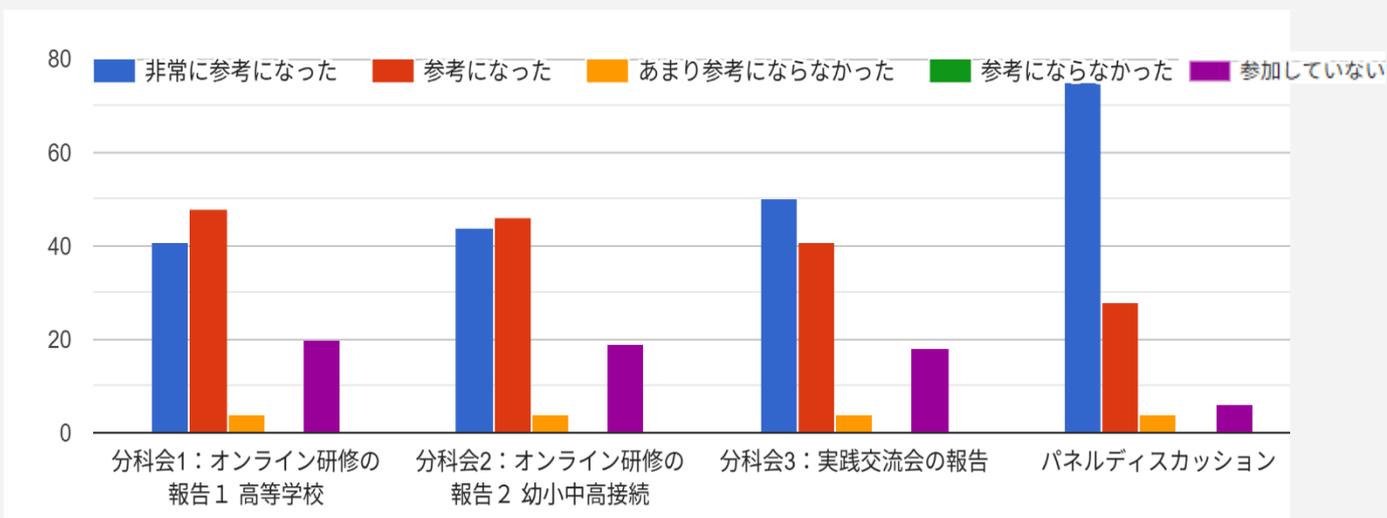
(参加者253人、回答113件、回答率44.7%)



外国人児童生徒等教育の教師養成・研修の経験 (複数選択)



満足度「参考になったか」



自由記述より

お取り組みを総括できてありがたかったです。また、アラクトモデルのことを知り勉強になりました。「文化的言語的マイノリティの子供たちの心身の健康に関する関係者の認識-質問紙調査の結果から-」は衝撃的でした。自分のしていた協働が言語化されている気がしました。

文科省や研究者の方のご説明と現場からのボトムアップ型提言の両方を学ぶことができました。

教育現場ではみんな困っている(山崎氏)、指導者はマッチョになる必要はなく、次につないでいくことが大切(西村氏、結城氏)、「包摂」ということばが示すもの(佐藤氏)という声に勇気づけられました。

パネルディスカッションで登壇された先生方ご自身の気づきや問題などを広く共有していただいた点が参考になりました。特に、「課題を全員で共有する」ということの真の実感(ご経験とともにご説明くださったこと)や、「教員はすべてができるわけではない。できないことを見極めて、誰

につなげるといいかを判断する力を養い、それを共有すること」とおっしゃっていたことが大変胸に刺さりました。

学校が抱える内容が多くなっている今、「チーム学校」の考え方は重要。それには課題の見える化と共有、そのために安心して話し合うことの大切さを感じました。まずは窓口になる担任の先生や支援して下さる先生方と風通しよく言葉を交わし、それを学校内に共有していただきやすいように子どもの様子を提供していくことが、先ず私の立場でできることなのかなと思いました。

「包摂」という言葉の意味やイメージがより具体的になりました。「他者との関係で、安心して自分の経験を自由に語り合える場を作る」そのことが包摂に繋がるとのお話、とても共感しました。

今、教育現場は悲鳴をあげています。保護者からのクレーム(もちろん、我が子を思っの言い分なのですが)、児童の多様性、教員間の認識のズレ、教員の孤立。そんな中で、現場の先生たちは真摯に子どもたちを見つめているし、子どもたちも先生を信頼して、学習し生活しようとしています。私は、後ろから、隙間から子どもたちや先生方を見つめている立場なので、今日のパネルディスカッションの内容は、職場に持ち帰り、伝えたいし、私も実践したいです。

小中学校の取り出し授業で日本語指導をしています。その現場で感じるのは、自分の日本語指導力は十分なのか、子どものことを一緒に考えるチームがほしいということです。「教育者・支援者の育成」が個人の頑張りにとどまらず、「組織づくり」が同時に進められる人材育成になればよいと願っています。

教育委員会からの派遣で日本語指導を巡回で行っていますが、学校の先生方や教育委員会の先生も異動等があり、継続してかかわっている私のほうが先生方に情報提供やレクチャーをさせていただく機会が多くなってきました。市町村の先生方に外国人児童生徒への指導の研修がもっと届いてほしいと思うとともに、支援員や母語支援員への研修も定期的に行っていただければと思いました。個人で研修情報を探すしか今は手立てがないのが困っていることです。

日本語教育担当者の研修会は県や市で行われていますが、初心者向けのものが多く、継続して日本語指導を行っている教育者については、どのような研修をうけたらいいのだろうかと思うことがあります。ただ、毎年初心者の方が多くいるので、そうした方が受けていく研修も必要だと思います。そのため、それぞれに合う研修という難しいなと思っていましたが、最後にメンター制度のようなものとのヒントをいただいたので、実践してみたいと思いました。

多様な文化的言語的背景を持つ子どもたちの現状や課題、ポテンシャルは教育現場でも理解されていないと感じることが多いので、教員の養成過程や一般の教育研修でも積極的に取り上げていただければと切に思います。

私自身は包摂的な学校教育を目指すことは重要である一方で、それが日本語能力や教科学力に収斂してしまう現状に課題を感じていました。そうした点において本シンポジウムでは、それらをほぐす視点(社会モデル的な視点)が提示されていたことが学びとなりました。私自身は都市部・地方部・過疎地を繋げるネットワークを立ち上げ、先生方を繋げる仕組みをつくろうとしています。意欲ある先生方が全国に多くおられることにも心強い気持ちになりました。